

MLK50 の年にちなんで

——キング牧師の実像を求めて——

川島正樹（南山大学）

はじめに——1968年の歴史的意義とキング牧師像の再検討

現代史における世界的な転換点として記憶され続ける「1968年」の50周年を前にして、その歴史的意義を再訪するべく、筆者が所属する南山大学ではアメリカ研究センターを中心に『1968年』の意義に関する総合的研究——『時代の転換期』の解剖』と題された共同研究が企画実行された¹⁾。半世紀前の世界を顧みれば、フランスのパリで「五月革命」が起こった²⁾。ソ連による事実上の支配下に置かれた東欧でも「プラハの春 (Pražské jaro)」に象徴される自由化運動が起こり、いったん挫折を強いられたが、それはやがて1980年代末に冷戦の終結に結び付くのである³⁾。日本でも日本大学に端を発した全共闘（全学共闘会議）による学生運動が東京大学でも高揚し、安田講堂が学生たちに占拠され、翌年春の入試が中止される事態に至ったことは、多くの若い読者にとっては信じ難い歴史的事実であろう⁴⁾。

このように「1968年」は様々な意味でその後の世界的な画期点となったとすることができるが、アメリカ合衆国（以下では「アメリカ」と略記）にとって「1968年」は他のどの国にもまして現在にまで影響を及ぼし続ける歴史の転換点となった。1968年1月30日、アメリカの軍事介入が頂点に達していたベトナムでは「テト攻勢 (Sự kiện Tết Mậu Thân)」が始まり、当時の南ベトナムの首都サイゴン（現在のホーチミン市）にあったアメリカ大使館が民族解放戦線の決死隊により占拠され、世界の人々にアメリカの「勝利」への大いなる疑いを抱かせた。その余韻も冷めやらぬ3月16日には悪名高い「ソンミ村虐殺 (Thảm sát Mỹ Lai)」事件が起こった。「ベトナム反戦」への国民的な機運の高まりの中で、3月31日、再選を目指していたリンドン・B・ジョンソン (Lyndon Bains Johnson) は11月の大統領選挙への「不出馬」を表明した⁵⁾。その直後の4月4日、既にその1年前から「ベトナム反戦」の立場を表明して政府との対決姿勢を鮮明にし、2月以来テネシー州メンフィス (Memphis, TN) で続いていた約1300名の黒人のみの臨時雇いの清掃労働者によるストライキを支援していたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師 (The Rev. Martin Luther King, Jr.) が暗殺された。ひと月後の6月5日深夜、民主党の有力大統領候補でベトナムからの米軍の撤退と貧困対策の拡充を掲げたロバート・F・ケネディ (Robert Francis Kennedy) がカリフォルニア州の予備選挙で勝利を確保した直後に銃撃を受け、翌未明に亡くなった。映画にもなった『いちご白書』で描かれた有力大学で連鎖的に起こっていた学生の抗議活動も警察によって鎮圧され、11月の大統領選では「法と秩序」 (Law and Order) を訴えた保守派共和党のリチャード・ニクソン (Richard Milhous Nixon) が僅差で勝利した⁶⁾。1960年11月の選挙に勝利した若き大統領ジョン・F・ケネディ (John Fitzgerald Kennedy) の登場で幕開けした「60年代」の改革の息吹は事実上、70年代の到来を前に潰えたのである。

キング牧師の名を聞いて多くの読者がすぐ思いつくのは、おそらく1963年8月28日に首都ワシントンの中心部の「ナショナル・モール」(the National Mall)で開催された奴隷解放宣言百周年の集会で、大理石のリンカーン像を背にした壇上から25万人もの聴衆を前に発せられ、世界的にも拡散された「私には夢がある (I Have a Dream)」演説、および翌年のノーベル平和賞の受賞で象徴されることになる、「非暴力の人種統合主義者 (the advocator of nonviolence and racial integration)」というイメージであろう。2018年にはキング牧師の愛称的な略称である「MLK」と暗殺50周年における追悼の意味を重ねて「MLK50」と呼ばれる一連の様々な記念／祈念行事が、彼の人生の終焉の地であるテネシー州メンフィスに所在する国立市民権博物館 (National Civil Rights Museum) を中心に営まれ、その遺徳が偲ばれるとともに、50年の節目を迎えて改めてキング牧師が残した未完の課題についての再確認がなされる動きが見られた⁷⁾。上述の、多分に研究者レベルにおいても依然として揺るぎなき「官製キング牧師像」への修正を迫る研究も徐々に世に出されつつある⁸⁾。本稿ではこのような近年の傾向を踏まえ、従来の言わばアメリカの主流社会、とりわけ公安当局や支配階級にとって安全で都合の良い、米国の内外で現在においても多くの人々の心に刻印されたままの公的なキング像に修正を迫ること、むしろ当局が危険視したキング牧師の実像の一端を提示することを第一の目標として掲げる⁹⁾。

半世紀を経た現在に目を転じれば、二期続いた「黒人初の大統領」を引き継ぐ大統領選挙では50年前と酷似した状況が生まれ、現在アメリカと世界は「1968年」に匹敵する混迷を強いられている。本稿では、キング牧師の死の直前の活動に焦点を当てながら過去50年を振り返ることで、揺らぎつつあるとはいえ依然としてアメリカがその中心に位置し続ける世界の行方を展望し、キング牧師の遺訓を再確認し今後に生かす手がかりも追求したい。

1. 二分されるキング牧師の活動

1) 生い立ちから前半生における達成まで (1929～1965年)

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは1929年1月15日にジョージア州アトランタ (Atlanta, GA) で生を受けた。彼の誕生日として毎年1月の第三月曜日がアメリカの祝日と定められている。ちなみに、アメリカで誕生日が祝日とされているのは他にジョージ・ワシントン (George Washington) とエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) の2名だけである。キング牧師の父のマイケル・ルーサー・キング (Michael Luther King) はアトランタで長年続くエベネザー・バプティスト教会 (Ebenezer Baptist Church) という黒人バプティスト派教会の牧師だった。このことはキング牧師が「人種」で隔離されていたとはいえ、南部の黒人社会におけるエリートの家庭に生まれたことを意味する。黒人牧師は高学歴で、しかも他の多くの黒人と異なって白人の経済的圧迫も受けにくい、黒人中産階級の代表的な職業であった。黒人牧師のDNAを引き継いだマーティンは地元高校の生徒として弁論大会で優勝しており、後の演説の才能を垣間見せている。地元アトランタの有名黒人大学であるモアハウス・カレッジ (Morehouse College) に飛び級で進学して牧師の資格を得た後に北部へ転住して、ペンシルヴァニア州のクローザー神学校 (Crozer Theological Seminary) で修士号を取得した後、ボストン大学 (Boston University) でPh.D.を取得したマーティンは、いわばエリート中のエリートの黒人だった。

1954年5月17日に連邦最高裁が「ブラウン対教育委員会」判決 (*Brown v. Board of Education*)

で、「ジム・クロウ」(Jim Crow)と呼ばれた、南部の州法や自治体条例で定められた「人種」による隔離教育を違憲とする画期的な判決を下し、4カ月後にマーティンはアラバマ州モンツゴメリー (Montgomery, AL) のデクスター・アヴェニュー・バプティスト教会 (Dexter Avenue Baptist Church) の牧師として招聘された。1年3カ月後の1955年12月1日、黒人中年女性ローザ・パークス (Rosa Parks) が、バスに乗車中に、市条例で警官と同等の権限を付与されていた運転士の命令を無視して逮捕されたことに端を発するバス・ボイコット運動の指導者に祭り上げられたキング牧師は、382日間続いたボイコット闘争の勝利によって、全国的な「市民権運動の指導者」と目されるようになった¹⁰⁾。

その1年後の1957年秋に、白人のみが入学を許されていた名門公立校であるセントラル高校 (Central High School) への9名の黒人生徒の入学に、地元白人民衆が暴徒化して反対したアーカンソー州リトルロック (Little Rock, AR) での「学校危機」事件が起こった。1960年2月に学生によるランチカウンターでのジム・クロウに直接行動で抗議する「座り込み」(Sit-in) 運動が始まると、連鎖的な地域闘争が南部各地に起こった。同年初夏にキング牧師率いたジョージア州オールバニー (Albany, GA) での地域闘争は挫折を強いられたが、1963年4月から5月にかけて持続的に展開されたアラバマ州バーミングハム (Birmingham, AL) における地域闘争の成功によって、翌年には包括的な差別の禁止を盛り込んだ市民権法 (the Civil Rights Act of 1964) が成立し、さらに翌1965年1月から2月にかけてアラバマ州のセルマ (Selma, AL) で展開された直接行動によって成立した投票権法 (the Voting Rights Act of 1965) という同じく強力な連邦法が成立することで、多大な犠牲の末に奴隷解放と市民的平等権を黒人にもたらした100年前の南北戦争後の憲法修正による約束が実現されることとなった。こうして市民権運動は約10年間の街頭での苛烈な直接行動を通じて、ジム・クロウの撤廃と法の下での平等の達成という当初の目的を実現したのである。その理念を高らかに謳い上げたのが、先述の首都ワシントンで開催された奴隷解放宣言百周年の集会で25万もの聴衆を前に発せられた「私には夢がある」演説であった。翌1964年末のノーベル平和賞の受賞とも相俟って、キング牧師の「非暴力の人種統合主義者」という、当時「第三世界」(the Third World) を主な舞台としてソ連との熾烈な冷戦を戦うアメリカの国民的理想に見合う当局に好都合なキング牧師の公的イメージが確立されたのである。

キング牧師の栄光に満ちた「非暴力の人種統合主義者」としての揺るぎない一般的イメージはこの前半生によって形作られたものであり、それを象徴するのが上述の「私には夢がある」演説である。従来の公的イメージを形作ったのは演説の後半で語られたジム・クロウ撤廃という「夢」であった。それは当時進行中だった、南部黒人民衆を動員し、全国的なボランティアの支援を得て各地で闘われてきた地域闘争の高揚によって、ケネディ政権が議会への上程を決断した包括的な市民権法の成立を支援することで間もなく成就するのであった。キング牧師が唱道し、デモの参加者が頑ななまでに地元警察の暴力的弾圧に耐えるテレビ映像が象徴する非暴力主義とも相俟って、その主張は広くアメリカ国民の共感呼び起こした。同法案は、100年前に起こった大統領の暗殺とその後の議会主導の急進化と同じく、間もなく起こる大統領の暗殺と引き換えに成立することとなる。

これに対して、キング牧師が演説の前半部分で要求したのは、奴隷解放宣言百周年を記念する、俗に「ワシントン大行進」と呼ばれる集会の正式名称である「職と自由を求めるワシントン行進」(the March on Washington for Jobs and Freedom) が象徴する、独立宣言が謳う「幸福追求の権利」という自由の実質化、すなわち経済面での自立の保障であり、具体的には安定

した雇用の確保であった。奴隷解放宣言を称賛しつつも、彼は次のように100年前の南北戦争後の南部再建期が現在に残した自由の実質化という未完の課題を強調した。

しかし100年を経た今日、黒人は依然として自由ではない。100年を経た今日、黒人の生活は、悲しいことに依然として人種隔離の手かせと人種差別の鎖によって縛られているのです。100年を経た今日、黒人は物質的繁栄という広大な海の真只中に浮かぶ、貧困という孤島に住んでいるのです。100年を経た今日、黒人は依然として米国社会の片隅で惨めな暮らしを送り、自国にいながら、まるで亡命者のような生活を送っているのです。そこで私たちは今日、この恥ずべき状況を劇的に訴えるために、ここに集まったのです。ある意味で、私たちは、小切手を換金するためにわが国の首都に来ているのです。私たちの共和国の建国者たちが合衆国憲法と独立宣言に崇高な言葉を書き記した時、彼らは、あらゆる米国民が継承することになる約束手形に署名したのです。この手形は、すべての人々は、白人と同じく黒人も、生命、自由、そして幸福の追求という不可侵の権利を保証される、という約束でした。今日米国が、黒人の市民に関する限り、この約束手形を不渡りにしていることは明らかです。米国はこの神聖な義務を果たす代わりに、黒人に対して不良小切手を渡したのです。その小切手は「残高不足」の印を付けられて戻ってきたのです¹¹⁾。

キング牧師の演説の3カ月後に凶弾に倒れたケネディを引き継いだジョンソン大統領は、二つの連邦法を成立させることで一世紀前の憲法修正による「法の下での平等」の約束を果たすと同時に、キング牧師の求めに沿って「結果の平等 (equality as a result)」に言及して「貧困との戦争」(the War on Poverty)を宣言した¹²⁾。次項で触れる「長く暑い夏 (the long hot summers)」で最大規模の事件となるデトロイト暴動(1967年7月28日勃発)を調査した大統領諮問委員会の報告書(1968年3月1日公開)でも「人種」で深く分断されたアメリカ社会の修復が求められた¹³⁾。黒人人口の半数を占めるゲットー住民を含む黒人民衆の経済的要求はジョンソン政権と白人リベラル派の政策構想と軌を一にしていたのである。

2) 短すぎた後半生と現代に残された未完の課題 (1966～1968年)

筆者は、39年というキング牧師のあまり長くはなかった人生を1965年で二分するという、他の研究者も採用する考え方には、1994年に発表した拙稿でも論じたとおり、比較的早い段階から賛同していた¹⁴⁾。筆者および本稿の註で挙げるキング研究者たちは、キング牧師による「人種平等」への歴史的貢献の真骨頂は、実はわずか2年半という、あまりにも短いキング牧師の後半生にこそある、と考えている。そしてそのような主張は必然的に、なお根強いままの「非暴力の人種統合主義者」としての従来の「官製キング像」に重大な修正を提起することになる、と筆者は考えているのである。

1965年夏、現在はカリフォルニア州ロサンゼルス市 (Los Angeles, CA) の一部となっている、当時は独立自治体であったワッツ (Watts) で黒人民衆による暴力的な反乱が起き、これ以降3年間、毎夏に北部や西海岸の大都市中心部の黒人ゲットーで「人種暴動」が頻発し、当時「長く暑い夏」と言われた。キング牧師たちが大衆的な「非暴力直接行動」で勝ち得た投票権の保障を含む「法の下での平等」が100年前から額面上は保障されていた北部や西海岸の大都市の黒人集住区のゲットーで問題化していた、世襲的な貧困と、法の強制に拠らない「人種」による事実上の住宅や学校の隔離の壁に苛まれてきた黒人民衆の怒りが爆発し、キング牧師は対応を迫られることになった。1966年1月26日、キング牧師は妻のコレッタ・スコット (Coretta

Scott King) とともに、シカゴのウェストサイドのノースローンデイル (North Lawndale) のサウス・ハムリン街 1550 番地 (1550 South Hamlin Ave.) に所在する、集中的な貧困と多発する犯罪で当時既に悪名が高かったゲッター地区のアパートに住み着いて、直接行動を武器として居住区の「人種統合」を要求する地域闘争に踏み切った¹⁵⁾。ここで読者諸氏に記憶されるべき重要な事実は、キング牧師が主に南部以外の北部や西海岸諸州の黒人集住地区を有する大都市の象徴的な存在であるシカゴを闘争の第二幕の地として選んだ際に、黒人相手の商売で成功した比較的富裕な黒人が居住する、黒人の南部農村地帯から北部工業都市への「大移動」(the Great Migration) の第一波の産物である、二ないし三代を経てアメリカ主流社会への同化を果たした白人系の移民諸集団のスラムと類似した、いわゆる「第一次ゲッター」を代表するサウスサイドの居住区ではなく、1940 年代以降に起こる第二波の「大移動」、すなわち綿摘み作業の機械化に伴ってわずか 30 年間に 500 万人もの黒人が南部から追い出され、北部や西海岸の大都市の一角に集住した結果生まれた、より貧しく絶望に満ちた「第二次ゲッター」の象徴というべきウェストサイドのノースローンデイルを活動拠点に選んだことである¹⁶⁾。

しかしながら、連日の白人労働者階級の居住区への「住宅の統合」を求めるデモ行進の最中に、南部以上に厳しい地元白人反動派の暴力的反発に遭遇して負傷したキング牧師は、市長リチャード・デイリー (Richard J. Daley) から名ばかりの妥協を得たのみで、事実上の撤退を余儀なくされた。時同じくして、南部ミシシッピ州では地域闘争を中心的に担う学生非暴力調整委員会 (the Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC [略称の発音は「スニック」]) の指導者ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) たちによる「ブラック・パワー」(Black Power) の叫びがマスコミの注目を浴び、瞬く間に全国の若い黒人たちに拡散浸透し、「非暴力による人種統合」の旗手としてのキング牧師の名声は揺らいだ。間もなく、死の丁度一年前の 1967 年 4 月 4 日にニューヨークのリヴァーサイド教会 (Riverside Church) で行われた「ベトナムを超えて (Beyond Vietnam)」と題した講演で、盟友と目されたジョンソン大統領が関与を深めるベトナム戦争に反対の立場を鮮明化したことで、キング牧師は FBI (Federal Bureau of Investigation) や MI (Military Intelligence) による対敵諜報活動 (COINTELPRO) の対象とされ、厳しい監視下に置かれるに至る¹⁷⁾。

3) キング牧師とマルコム X

アメリカの「人種」に纏わる分野に多少とも知識のある読者においては、自衛に限定的とはいえ「暴力容認」で「人種分離主義 (separatism)」のマルコム X (Malcolm X) は、「非暴力の人種統合主義者」のキング牧師と対極に位置付けられるべき黒人指導者であるという認識が定着しているであろう。ところが専門的な研究者の間では、かなり以前から両者は対立的であるよりも相互補完的であり、誰よりも当人たちがそれを意識していた事実が明らかにされている¹⁸⁾。筆者の個人的な経験を開陳すれば、1994 年の夏、日本の代表に選ばれてボストン・カレッジ (Boston College) で 1 カ月にわたる当時の USIA (United States Information Agency、アメリカ文化広報庁) 主催の国際アメリカ史合宿セミナーに参加した折、アフリカ諸国の代表らとボストンにおける黒人街のロックスベリー (Roxbury, Boston) を訪れた際に、土産物店を覗いたところ、1964 年にたった一度だけキングとマルコムが偶然連邦議会議事堂で出くわした折にこやかに握手を交わす写真を引き伸ばしたポスターが売られており、筆者はそれを購入した思い出がある (写真 1 はその元となった画像)。黒人民衆の間ではこの二人の指導者が「分業」をしていたことは当時から既に常識であった。ただし、キングにとって問題となったのは、自



写真1：キング牧師（左）とマルコム X、1964年3月26日、連邦上院議事堂前で。（連邦議会図書館蔵）

らの暗殺死のわずか3年前のマルコムXの暗殺であった。マルコムXの予期せぬ暗殺死の結果、キング牧師は準備不足のままマルコムXの役割まで担わざるを得なくなったのである。それはまさに西海岸や北部の大都市で、マルコムXの影響を受けた若者たちの間で「ブラック・パワー」の叫びが高まり、ゲットーの民衆による絶望的な暴力的反乱が頻発する時代の始まりとも重なった。苦悶に満ちた短すぎる後半生で、キング牧師は「暴力か、非暴力か」という二分法に対して「非暴力的社会変革」という手法の極

限化を追求する道を選ぶのである。

本節は以下のように小括しうる。約1世紀前の「法の下での平等」という約束をようやく達成した後には平等の実質化を目指して尽力した後半生におけるキング牧師は、マルコムXが唱道した「自衛的武装」と「人種的団結」に呼応して暴力的反乱に決起した西海岸や北部の大都市ゲットーの黒人民衆と寄り添うことを強いられた際に白人労働者階級の暴力的反発に直面する中で、従来の白人世論向けの理想主義的な「人種統合」の実現という目標をいったん引込め、本来の第一の目標でもあった経済面での実質的平等を求め、より現実主義的方向へと舵を切り直し、間もなく新たなスローガンとして「経済的正義 (economic justice)」を主張するようになるのだった。それは「結果の平等」に言及しつつ「貧困との戦争」を宣言したジョンソン政権とリベラル派が目指す方向性とも多分に重なった。静かに進められたこの方針転換は従来言われてきたような「法の下での平等」から「実質的平等」への目標の進展という社会運動の単純な進化論的物語ではなかった。

次節以降では、短すぎる後半生を再吟味することで、シカゴ闘争で味わった挫折を契機に、若き黒人活動家とゲットーの民衆の「ブラック・パワー」の叫びと暴力行使の広がりにつれ、暗殺死の直前に再確認するに至る、キング牧師も共有した伝統的黒人解放思想の本質を明らかにする。

2. メンフィスへの道

1) 捜査当局における「ブラック・パワー」への深い疑念

既に再三触れたように、1965年夏を契機に「長く暑い夏」が始まり、主に南部の外の、ジム・クロウのような地方法体系による隔離の強制が実行されて来なかった西海岸や北部の大都市で、法の強制に拠らない、偏見に基づく長年の差別的慣習を背景とした社会的圧力による「事実としての」隔離 (*de facto segregation*) の結果としてゲットーに押し込められ続けた黒人住民による、暴力的な反乱の季節が到来した。怒れる「暴徒」のスローガンとなったのが「ブラック・パワー」であった。FBI や MI などの公安当局が何よりも恐れたのが黒人ナショナリズム、すなわち黒人民衆が白人のコントロールを離れて独自の運動を展開し、アメリカの内部的な結束を揺るがす事態であった。冷戦とベトナム戦争のさなかでもあり、このような動きは「共産主義の浸透」と疑われ、厳しい「対敵諜報活動 (counter intelligence)」の対象とされ、マル

コム X だけでなく、キング牧師もその対象に含まれた。とりわけ 1965 年 2 月 21 日のマルコム
の暗殺死を契機に北部都市ゲットーへの運動拠点の移動を画策したことで、キング牧師への諜
報活動は強化された。それは間もなく情報収集の域を超え、しばしばマスコミを使った人格攻
撃を含む、妨害活動へとエスカレートした¹⁹⁾。

FBI はなぜ「いかなる手段をもってしても (by any means necessary)」と宣言して暴力行使
を示唆して黒人民衆の生活の向上と劣等意識の解消の実現を目指したマルコム X の亡き後に、
「非暴力による人種統合」を掲げてノーベル平和賞を受賞したキング牧師を対敵諜報活動の対
象に指定したのか。その理由は二点あり、FBI の前身の司法省内の捜査局 (Bureau of
Investigation) の局長に就任した 1924 年以来その死まで 48 年にわたって秘密情報を背景に政
治家の生殺与奪権さえ握る影の政治支配者として君臨した FBI 長官ジョン・エドガー・フー
ヴァー (John Edgar Hoover) が囚われていた妄想に近い二つの強烈な嫌悪感に関係している。そ
れは反共主義と「人種」に基づく偏見であり、両者は複雑に絡み合っている。

第一次世界大戦を契機に出現したソヴィエト連邦の誕生とともに国政の重要な要素となった
反共主義は、第二次世界大戦中には収まったものの、戦後の冷戦下で再び活性化した。共産主
義の浸透への脅威はベトナム戦争の激化とともに FBI や MI において一層の現実味を帯びるに至
った。アメリカの反共主義は当初から明らかに「人種」に基づく偏見と絡み合っていたが、ア
ジアやアフリカにおける植民地の政治的独立と経済的自立を求める歴史の流れの顕在化を背景
として、ソ連の浸透工作への疑念は深まった。このように長い歴史を持つ被抑圧者の国際的闘
争への反共主義を伴う疑惑と不信は、国内外の黒人ナショナリズムへの偏執的な嫌悪ないし恐
怖の感情にも結び付いた。筆者はかつて第一次世界大戦の前後にアメリカを中心にカリブ海域
も含めた百万を超える黒人民衆に支持を拡大したがゆえに司法省捜査局の疑念を深めさせ、国
外退去処分となり、その後故郷ジャマイカの独立運動の創設者として英雄視されたマーカス・
ガーヴィー (Marcus P. Garvey) を研究対象として政府関係のかつての機密文書を含む一次資
料を通読した際に、フーヴァーが第六代長官に就任する以前の、第一次世界大戦を契機として
高まった連邦捜査局内の反共主義と世界の非白人系諸集団の「民族自決」を目指す植民地独立
運動への恐怖と嫌悪の表現の多さに驚愕した。機密扱い解除となった資料には、日本の国際派
右翼として知られた満川龜太郎とガーヴィーとの関係についての当局の関心を示す文書も含ま
れていたことは特筆に値する²⁰⁾。

2) シカゴ住宅開放闘争と「人種統合」へのキング牧師の深い挫折感

既述のごとく、キング牧師は「都市暴動」の続発に対応するべく、また本来の目的である実
質的な平等化への第一歩として、北部都市ゲットーへの活動の拡大を決断した。拠点として選
ばれたのが、最大のゲットーを有する北部大都市であるシカゴであった。ここで南部農村地帯
から工業的な北部都市への黒人の二波の「大移動」についてごく簡単に復習しておこう。既に
触れたように、まず 1910 年代以降、第一次世界大戦による海上交通の停滞や、東欧や南欧から
大量に流入した「新移民」(the New Immigrants) への反発と相俟って、工業化が進む北部都市
では労働力不足が深刻化し、国内、とくに南部農村地帯から黒人が北部大都市へ 30 年間に 150
万人も移動した。そして 1940 年代初頭に南部の綿摘み作業が機械化されると並行して、黒人
が多くを占める小作人や農業労働者が職を失った。第二次世界大戦とそれに続く朝鮮戦争とベ
トナム戦争を背景とした軍需景気による労働力需要のさらなる高まりとも相俟って、1960 年代
末までの 30 年間にさらに 500 万の南部農村地帯の黒人民衆が移動を強いられ、彼らは北部や西

海岸の大都市の劣悪なゲットーに集住を強いられた。第一波で形成された「第一次ゲットー」の黒人住民の一部は黒人相手の商売を営むなどで中産階級化し、白人移民集団の民族的スラムとかなり類似した制度化がなされた²¹⁾。その一方、数もはるかに膨大で、南部農業の機械化で故郷から追い出された「第二次ゲットー」の黒人住民はより一層貧困で上方への流動化を奪われた「第二次ゲットー」を形成した。キング牧師たちが拠点に選んだのはシカゴの第二次ゲットーのうちでも「犯罪多発地区」として悪名高いウェストサイドの中心に位置するノースローンデイル地区であった。筆者はかつて科学研究費補助金の支給を受け、二度の夏休みを使って、地元の黒人研究者やジャーナリストさえ足を踏み入れない同地を訪れたが、21世紀初頭においても状況は改善していないままであった²²⁾。キング牧師らはそんな貧しい犯罪多発地区の真只中に位置するアパートを借りて地域改善活動に従事するとともに、隣接する白人労働者階級の居住区にデモ行進をかけて「住宅開放」(Open Housing)を訴えた。つまり白人労働者階級の地区へ黒人が転住することを通じて「人種」で隔離されたゲットーの解消を図ろうとしたのである。しかしながら、キング牧師らは白人住民からミシシッピでさえ経験したこともない暴力的な反発を受けた。投げられたレンガが彼の顔に当たって負傷するという予想を超えた激しい反応にあったキング牧師は深い挫折感を味わった²³⁾。なぜ白人労働者階級は居住区への黒人の転入を嫌ったのだろうか。不動産市場には「人種」に纏わる偏見が埋め込まれ、黒人の流入が起ると不動産価格が急速に下落したからである。長期の住宅ローンを抱え、自宅の価値が限りなく低下する不安に直面した白人住民は、集団化し、極度に防衛的な姿勢をとることを余儀なくされていたのであり、自らの生存をかけて「住宅の開放」に反対したのである。

形ばかりの合意をデイリー市長と結んだキング牧師は翌1966年には事実上の撤退を強いられた。それを契機に、キング牧師は次第に「人種共学」や「住宅開放」のスローガンが象徴する空間的な「人種統合」よりも、「貧困の解消」や「教育の質改善」の要求といった、白人民衆も受け入れやすい、空間的な共有を伴わない、「人種」の枠を超えた「経済的正義」というスローガンを掲げ、「人種」を超えた階級的な連帯を目指しながらゲットーの問題を解決する方向へと運動目標をシフトさせていった。既述のごとく、ベトナムへの軍事的介入を深めて「貧困との戦争」への関与を低下させつつあったジョンソン政権に対しても、1967年春以降に「反戦」と「貧困解消」の立場を明示し、ケネディ政権時代からの長年の連邦政府との盟友関係を断ち切った。この間に、キング牧師の元へ南部の地域的な運動への支援の要請が舞い込んで来ていた。1966年9月6日、キング牧師は地元の活動家たちの要請を受けてテネシー州メンフィスに二度目の訪問をした。それは彼がシカゴにおいて、かつてナチスに追われて移民したユダヤ系の二世代を含む白人労働者階級と中産階級の居住区で5000人もの群衆との対峙の最中に頭部を負傷し、精神的にも衝撃を受けた直後であった。キング牧師をメンフィスに呼び寄せたのは、ナッシュヴィル(Nashville, TN)で学生を組織して「座り込み」運動において成果を上げていた牧師仲間のジェームズ・ローソン(James Lawson)だった。SCLC(the Southern Christian Leadership Conference、南部キリスト教指導者会議)の頼りになる組織者が活動を続けるメンフィスは、清掃労働者のストライキが勃発する1年半前から、キング牧師にとって馴染みある南部都市になっていたのである²⁴⁾。

3. 清掃労働者ストライキ支援の最中の暗殺死

1) ストライキの続行と「貧者の行進」

1968年2月1日、テネシー州西部のミシシッピ川に面したメンフィス市内でゴミ回収作業中の2名の黒人清掃労働者が水圧式のゴミ処理車後部のゴミ圧搾装置に巻き込まれて死亡するという何とも痛ましい「事故」が起きた。本事件の精密な歴史研究を行って本文だけでも500頁を優に超える大著を出版したワシントン大学タコマ校(the University of Washington, Tacoma)のマイケル・ハニー教授によれば次のような有様であった。

二人の黒人清掃労働者 (Echol Cole [36歳]と Robert Walker [30歳]、引用者註) が雨の中での廃棄物回収中にゴミ収集トラック後部の水力圧縮機に巻き込まれて死亡した。黒人労働者には作業も手袋も支給されず、シャワー室も使用できなかった。労組組織者 T・O・ジョーンズは1964年以来この種のトラックの危険性を指摘して使用を停止するように公共事業局に要求し続けていたが、無視されていた。この事故は長年にわたる危険の放置で起こるべくして起こった²⁵⁾。

ハニー教授は次のように続ける。

言うまでもなく、二人の死んだ男たちは黒人だった。公衆衛生業務に従事する労働者は、管理職を除き、ほとんど全員が黒人だった。生ごみ回収作業は市当局が黒人のみに割り当てた職種だった²⁶⁾。

市当局から正規職員ではなく臨時職員にすぎない黒人犠牲者の遺族の元へは、見舞金はおろか、遺体修復費用の請求書まで来たのである。

市当局は最高額2000ドルの死亡見舞金を支給する任意で自前による保険を提供していたが、ウォーカーとコールにはその余裕がなかった。市当局は二人が区分外で時給制の従業員で(彼らは即座に解雇され得た)、州による補償制度は彼らを対象外としていた。二人の遺体の処理を委ねられた妻と子どもたちはなげなしの金をはぎ取られた。葬儀屋は棺の代金を支払うめどが立つまで、遺体を引き渡さなかった。

市当局は遺族に1ヶ月分の給料と一人当たり500ドルの上乗金を支払ったが、それは一人当たり900ドルの埋葬料で使い果たされた²⁷⁾。

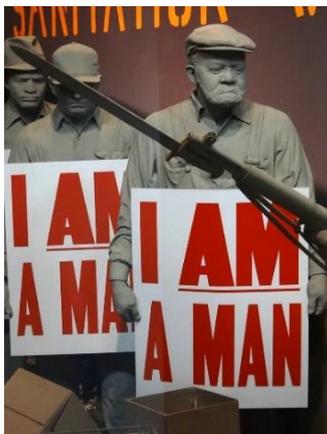


写真2：市民権博物館に展示される清掃労働者ストライキ参加者のレプリカ。(国立市民権博物館蔵)

怒りが爆発した1300名を超える黒人清掃労働者は自然発生的なストに突入した。やがて首都ワシントンにある全米州郡自治体労連(AFSCME)本部から黒人と白人の混合のオルグが派遣され、組織化がなされ、組合が結成され、市当局に組合の承認と労働条件の改善を求めて正式なストライキが始まり、いつ果てるともない闘争が続き、街中にはゴミが散乱し、首から「私は人間である」(I AM A MAN)と大きく書いたプラカードを首から下げた黒人労働者がデモ行進を展開し、そのそばを州兵部隊の装甲車が警備に当たるといった戦場さながらの光景が展開された(写真2参照)。間もなくキング牧師の元へ支援の要請が届いた。折から、全国から100万規模で「人種」を超えた貧困者を集めて首都ワシントンに

テント村を作り、貧困対策の拡充の要求が容れられるまで首都機能のマヒを画策すると宣言して「貧者の行進」を計画中のキング牧師は、その出発点としてメンフィスの清掃労働者のスト支援を位置付けることを思い立つのであった²⁸⁾。

2) 最後の演説

キング牧師たちは1968年3月28日に1万人規模のデモ行進を行うことになったが、当日は警察当局の裏工作や挑発があつて行進の途中から警官との間で暴力的衝突が起こり、暴動化し、略奪が起こり、警官の発砲で16歳の黒人少年ラリー・ペイン (Larry Payne) が殺され、キング牧師は一時的に撤退を余儀なくされ、かなり落胆したが、気を取り直し、地元の若者で構成される「ブラック・パワー」を信奉する団体のメンバーにも膝詰めで「非暴力行動」の説得を重ね、二度目のデモのために4月3日夕方に再度メンフィスを訪れた²⁹⁾。疲労困憊したキング牧師は依頼されていた夜の集会での演説を盟友のラルフ・アバナシー牧師 (Ralph David Abernathy, Sr.) に頼んだのだが、会場のメイソン・テンプル教会 (Mason Temple Church) の内外に押し掛けた1万人近くのほとんど黒人から成る聴衆はキング牧師の登壇を強く要求した。アバナシーからモーテルへの電話を受けて急遽駆け付けたキング牧師は有名な「山頂演説」(The Mountaintop Speech) を行った。現在ネット上でも視聴可能な、当時撮影された映像からも分かるが、キング牧師の神がかつたような表情が印象的であるばかりでなく、準備原稿のない全くのアドリブの演説の内容は、翌日の暗殺死を予言するなど、その内容も実に劇的である³⁰⁾。次のような、自らの死を予言する発言(「長生きすることはそれなりに意味があるでしょうが、今自分にとってそんなことはどうでもよい」)があるが、むしろ注目すべきなのは、その「約束の地」へ「私は皆さんと一緒にには行けないかもしれませんが、私たちは一つの民族として約束の地へ行き着けることを、今夜知っていただきたいのです」という箇所である(傍点は筆者)。次に該当の英語原文を示す。

And I don't mind. Like anybody, I would like to live a long life. Longevity has its place. But I'm not concerned about that now. I just want to do God's will. And He's allowed me to go up to the mountain. And I've looked over. And I've s-e-e-n the promised land. I may not get there with you. But I want you to know tonight, that we as a people will get to the promised land. And I'm happy tonight. I'm not worried about anything. I'm not fearing any man!³¹⁾

この“people”は可算名詞であり、したがって“a people”の和訳としては「一つの民族」が妥当である。そしてそれが具体的に指示するのは、キング牧師の目の前にいる人々、つまり黒人民衆であったことは明らかである。

ハニー教授は、かつて主に白人向けに発せられた「私には夢がある」と比べた、もっぱら黒人聴衆向けになされた「山頂演説」の特徴的意義について次のように述べている。

全国津々浦々に報道された有名な1963年の「私には夢がある」演説と違って、キングのメンフィスでの「山頂演説」を数百万もの人が眼前で聴くことはなかった。教会の中で数千人が肩を寄せ合っており、嵐が吹き荒れる戸外では1万もの人々がこの演説に聴き耳を立てていた。この瞬間はその場にいた人々にとって深く意識に刻まれ、多くの人々が生涯キングの言葉を胸に生きるようになった³²⁾。

かつての「私には夢がある」演説と違って、この「山頂演説」の聴衆のほとんどは地元の黒人民衆であった。彼らを前にしたキング牧師はもはや「人種統合の夢」を語ることはなかった。キング牧師が黒人聴衆に「見た」と語りかけた「約束の地」について彼自身は具体的に語っていないが、おそらく黒人たちが「ひとつの民族」として他の諸民族と平和共存しつつ経済的な自立が達成された共同体であろうと思われる。あくまでも通常の意味での「暴力」の行使を慎むことを前提としながらも、間もなく開始される、首都ワシントンに「人種」を超えた百万人規模の貧しき人々を呼び寄せ、さらなる「貧困との戦争」の実行を見るまで「首都機能の麻痺」さえ厭わないテント村を形成する実力行使は、南部選出の白人反動派連邦議員にとってはまさにマルコムXが是認する「暴力」を上回る威力を発揮しうるものであった。しかもキング牧師には有力大統領候補のロバート・ケネディも背後に控えていた。上記演説の翌日にキング牧師は暗殺され、全国主要都市の黒人ゲットーではこの時期の最後となる激しい暴動が一斉に勃発し、とりわけ首都ワシントンは戒厳令下に置かれた。そしてキング牧師亡き後のリベラル派の最後の望みを託されたロバート・ケネディも2カ月と1日後に暗殺された。それでも「貧者の行進」は首都ワシントンで実行に移された。それは確かに多数のブルドーザーを動員した政府の激しい弾圧で惨めな挫折を強いられたが、この間にメンフィスの清掃労働者は組合の承認と待遇の改善を勝ち取ることができたのである³³⁾。

筆者はメンフィスにおける MLK50 の一連の催しに参加した折に、50 年前にキング牧師の「山頂演説」が発せられた会場である、南部に特有のペンテコステ派 (Pentecostal Church) の、南部のみならず全国的にも最大規模の威容を誇る黒人系キリスト教会であるメイソン・テンプル教会を訪れ、改修中で立ち入りが禁じられていた同教会に入場を許されただけでなく、特別にかつてキング牧師が死の前日に立った同じ説教壇に立つことも許された。筆者はまずその建



写真3：キング牧師と同じ説教壇に立つ筆者。
2018年4月6日撮影（筆者蔵）

物の大きさに圧倒された。写真3はその時に撮影されたものであるが、緑豊かなメンフィス市内外郊地域の黒人中産階級住宅地に建つ威風堂々たる同教会を訪れた筆者には、地元の中産階級を多く含む教会関係者の誇りと自信に裏打ちされた、かつてのメンフィスの黒人コミュニティが相反する階級的利益を超えて一丸となって支援し、キング牧師というカリスマ的指導者の助力も得て秩序を保ちつつ果敢に最後の勝利の時まで団結して闘

われた清掃労働者ストライキの折の熱き息吹が、確かに感じられた。それは筆者にとってかけがえのない過去との対話の瞬間であった。

4. 改革の時代の終焉

1) 「法と秩序」を掲げるニクソンの登場

キング牧師暗殺の犯人とされたジェームズ・アール・レイ (James Earl Ray) は不思議なことに脱獄囚 (常習犯として懲役 20 年の刑で服役中の前年に脱獄) であり、どうして捕まることがなく逃亡し続けることができたのか、しかもどうやって高性能ライフル銃を入手できたのか、またどうやってキング牧師のメンフィスでの宿泊先を特定して最終目的を成就できたのか、犯行後に 6 月 8 日にロンドンのヒースロー空港で逮捕されるまでどうやって逃げおおせたのか、

その資金はどうしたのか、そもそもどういういきさつでキング牧師を殺す決意に至ったのか、等々、その単独犯行説には疑惑が尽きない。司法取引で死刑を免れた彼は囚人として1998年4月23日に70歳で病死した³⁴⁾。

キングの死の2カ月と1日後の6月5日夜に、キングと協力して反戦と貧困対策を大統領選挙戦の一番の争点として掲げていたロバート・ケネディがカリフォルニア州での民主党予備選挙で勝利した直後に銃撃され、翌未明に息を引き取った³⁵⁾。8月29日、シカゴで開催された民主党全国大会は流血の惨事となり、学生活動家とそのシンパやベトナム反戦派が強く推すジョージ・マクガバン (George Stanley McGovern) は敗れ、現職副大統領のヒューバート・ハンフリー (Hubert Horatio Humphrey, Jr.) が候補に選ばれ、最後の希望の星を失った若き民主党支援者の多くは大統領選挙への意欲を喪失し、11月の大統領選挙では「法と秩序」を掲げた共和党のリチャード・ニクソンが僅差で勝利を確保した。こうして改革の波と対抗文化の機運が高揚したアメリカの「1960年代」は早々に終幕を迎えることになった³⁶⁾。

その後ニクソン政権下で「アファーマティヴ・アクション」(Affirmative Action) が制度化される。この一見ラディカルな印象を与える政策は、しかしながら、ジョンソン政権が進めた「貧困との戦争」と比べて極めて安価であるだけでなく、民主党の伝統的支持基盤である労組と黒人中産階級に分断を持ち込めるという点で、共和党に有利な政策であったことに留意すべきである³⁷⁾。ともかく、その後訴訟が相次ぎ、最高裁が僅差で「逆差別」を認めた1978年以降は「人種」は合格や採用を決定する際の判断材料のうちの一つとなってしまふ。元々有利な立場にいた黒人が優遇される一方で大都市ゲッターの「アンダークラス」が放置され、黒人内部の分断が進んでいるだけではなく、今や若い大学教員のうちで最大の集団は白人女性となっており、彼女らはある意味で黒人以上の恩恵を受けている集団となり、華々しく脚光を浴びがちなジェンダーにまつわる偏見や差別と比べて、「人種」に基づく偏見や差別が解消されず放置されたままであるとの印象は否定し難い³⁸⁾。

2) ビートルズの二つの曲に反映された時代の急速な変化

本稿の最後の項において、当時の三つの世界的な大衆音楽のヒット曲を分析の素材に選ぶことで、時代の急速な変化を感じ取ることを試みたい。まず次々とヒットを生み出したイギリス人バンドであったビートルズの二つの対照的な曲を取り上げることで、歴史的転換点としての「1968年」を取り巻く時代の雰囲気の変化を再訪する。

ビートルズのポール・マッカートニー (James Paul McCartney) はキング牧師の暗殺の時期から半年ほどの間に、全く曲想の違う二つの作品を世に送り出し、どちらも世界的なヒットとなった。かたやフォーク調のアコースティック・ギターを主としたスリーフィンガー奏法による軽快なメロディーに乗せて希望的未来を歌った「ブラックバード (Blackbird)」(1968年6月10日録音)で、もう一方はソウルフルなビートの効いたロック調のサウンドに意味不明の投げやり気味の歌詞を乗せて叫ぶように歌われた、グループとしてはビートルズ最後の楽曲となる「ゲット・バック (Get Back)」(1969年1月27、28日録音)である。どうしてこのような曲想の変化が短期間に起こったのだろうか。よく言われるように音楽的志向性の違いが当時はっきりしつつあったポール・マッカートニーとジョン・レノン (John Winston Lennon) の「仲たがい」の急速な激化が原因なのだろうか。

ビートルズには極めて異例の、軽快で美しいスリーフィンガーのアコースティック・ギターの伴奏メロディーと裏腹に、「ブラックバード」の歌詞は非情に抒情的であると同時に、最後で

繰り返される「あなた方はまさにこの瞬間に決起する時を待っていたのだ (You are only waiting for this moment to arise)」や「あなた方はまさにこの瞬間に自由になる時を待っていたのだ (You are only waiting for this moment to be free)」という表現に象徴されるように、キング牧師暗殺直後に全米150を超える都市で続発し、とりわけ首都ワシントンで戒厳令が発令された黒人の抗議の「暴動」を賛美するような、極めて過激な内容である。グループ解散後のマッカートニーはソロのコンサートでこの曲を好んで演奏しているが、2016年にアーカンソー州リトルロックでのライブに際して、この曲のモチーフの一つに、1957年9月の新学期に、それまで白人のみに許されていたセントラル高校に入学を試みた9人の黒人生徒への応援の意味があったことをコンサート会場で聴衆を前に公表した³⁹⁾。

時計を1968年に戻せば、英国議会ではインドやパキスタン等旧植民地諸国からの移民制限が法制化された⁴⁰⁾。とりわけパキスタン人排斥運動が高まり、インド系も含めた外見上イギリス人と異なる人々が「パキ (Paki)」という蔑称で差別されたことは最近のクイーンのリードボーカルのフレddie・マーキュリー (Freddie Mercury) を描いたヒット映画『ボヘミアン・ラプソディー』 (*Bohemian Rhapsody*) (2018年) で取り上げられたことでも記憶に新しい。実は「ゲット・バック」にはレコーディングの際に断念された1969年1月9日に録音された「パキスタン人は来るな (No Pakistanis)」と題されたオリジナル歌詞があり、「元の場所に帰れ (Get back to where you once belonged)」の対象がパキスタン系をはじめとする非白人系移民とされている点で、同曲の歌詞は「レイシスト」のそしりを免れない問題のあるものであった。ポール・マッカートニーの本来の意図が移民禁止を企てた英国議会への抗議であったことは明らかであるが、何らかの理由、おそらくはアップル・レコード社側からの圧力で、ポール・マッカートニーは意味不明の歌詞を即興的に作ることとなり、アリゾナからカリフォルニアに引越をする独り者の「ジョジョ (Jojo)」と性別が曖昧な「ロレッタ・マーティン (Loretta Martin)」の、意味不明の物語に差し替えられたと推定される。ビートルズのファンには有名な1969年1月30日のアップル・レコード社屋上でゲリラ的に開催されて警官も動員された「ルーフトップ・コンサート」の様子は現在もユーチューブにアップされ、当時の彼らの怒りの表情が簡便に見て取れる。そこに映し出されるポールやジョンらの鋭い眼光と必死の演奏が視聴者に訴えかけるのは、仲間内の「不和」というより、当時英米両国や日本を含めた世界中で高まる若者や被抑圧者の急進的運動への連帯と、各国政府の弾圧への強い抗議であると解釈しうる⁴¹⁾。「ゲット・バック」は1960年代末の若者の抗議の声を強烈に代弁する最後の試みを象徴するものであったと見るができる。

他方、アメリカに目を転じれば、1969年8月15日から17日かけて、ニューヨーク州のアップステート地方に位置する小村ウッドストックで開かれた音楽祭 (Woodstock Music and Art Festival) では、もはや社会改革の声は上がることはなく、極めて個人主義的なヒッピー文化が「自由 (freedom)」や「解放 (liberation)」という言葉とともに謳歌される、新たな時代の幕開けが告げられた。ウッドストック音楽祭にも参加したクロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤング (Crosby, Stills, Nash & Young、CSN&Yと略記) が同年11月に録音し翌年5月にリリースしてヒットした「ヘルプレス」が時代の急速な変化を象徴した⁴²⁾。

しばし自らの無力さを嘆いた当時の学生運動家たちは、やがて主流社会でそれなりの地位を築き、かつての理想を思い起こす余裕を蓄えた。それがキング牧師の暗殺死の40周年の秋にアメリカ史上初の黒人の大統領の誕生をもたらす一要素となったことは疑いない。彼らは「我々にはできる! (Yes, we can!)」を標語に掲げ、SNS (social network services) も活用してそ

れを成就した。その間を振り返れば、1990年代初頭までに冷戦が終結すると同時に南アフリカのアパルトヘイトが廃止されていた。その後間もなくアメリカは二つの湾岸戦争を経験し、IT産業の隆盛がもたらしたバブル景気とその崩壊を経験する中で、あからさまな自己責任を標榜して福祉受給者を攻撃する新自由主義がはびこる混迷の時代が続いたが、日本では「リーマン・ショック」と呼ばれた2008年9月に始まる経済破綻を追い風にバラク・オバマ (Barak Hussein Obama II) 政権が誕生し、彼は4年後に再選も果たした。だがその後誕生したのは、グローバルな競争の波が遅れて襲いかかるに至った白人労働者階級に潜む反動的排外主義を躊躇なく煽りたてて辛くも勝利を確保した、現政権なのである。

政治と経済の循環的浮沈を繰り返しながら現在は50年前と同じく混迷を強いられているが、この間に世界の民衆が少なくとも二度の、国境を越えた広範な社会運動の広がりを経験していることを忘れてはならない。一つは1982年に燃え上がった、INF (中距離核弾頭ミサイル) の実践配備を凍結させることに成功した反核運動であり、もう一つは2011年秋に「99%の人々の連帯 (99% Solidarity)」を掲げて突如として始まり、やがて世界的に波及した「ウォール街占拠 (Occupy Wall Street)」運動である。確かに、現政権下でINF全廃条約は破棄され、前政権下で「ウォール街占拠」運動は警察によって暴力的に鎮圧された。だが、過去50年間の歴史が示すのは、心ある人々が理想とする社会の到来はそう簡単には訪れないという厳しい事実だけではない。上記の二つの例が示すように、不正の糾弾の連带的行動に応じる人は世界に多くいるという、心ある人々が絶望の淵に陥るのを思いとどまらせるような希望の手がかりも垣間見えることを忘れてはならない。

時に挫折を強いられ、嘆きの歌に癒されつつ、生活のために現実的な妥協を余儀なくされながらも、心の奥では決して理想の実現を諦めなければ、世界に多くいる同じ思いの人々と理想実現への連帯の契機は必ず到来する、という信念こそは、死の前日にメイソン・ temple 教会でキング牧師が黒人聴衆を前にして発した預言の本質であり、聴衆一人一人の心に生涯の支えとなるほどに深く刻印された。それはまた、彼の家系が代々職業とした、奴隷制の時代に端を発する黒人キリスト教会が今日まで発展させてきた伝統とも不可分である。それは黒人のみを対象とする排他的な救済思想ではなく、抑圧され、不当な苦難を強いられるすべての民衆を包摂する未来社会のために人々に連帯を説く希望の預言でもある⁴³⁾。MLK とマルコムはともに理想の堅持の重要性と立ちはだかる壁の厳しさを人々に知らしめたのである。ある意味で、ビートルズやCSN&Y、それに続く卓越した大衆音楽家たちは、言葉を越えた、より感性に訴えるやり方を駆使して、両者の相補的役割を演じてきたのである。

おわりに

本稿の締めくくりに、冒頭で掲げた、従来のキング牧師像の再検討という課題に答えを見出したい。歴史に「イフ」は禁物とされる。しかしながら、ここまでの歴史的な回顧を踏まえるなら、もし1968年にキング牧師とロバート・ケネディの暗殺がなかったら、その後のアメリカと世界はどうなっていたのだろうか、と筆者は問わずにはいられなかった。その一方で、二人の有力指導者の生死を超えた、アメリカのみならず日本を含めた世界の、人類史的な、抗し難い歴史の流れの存在に改めて気づかされた。それは良し悪し両側面を持つ個人主義の流れであり、平等な個々人の公正な競争を阻む、個々人に自己責任を問い難い「人種」・ジェンダー・障がいの有無や生育環境などの不利とされる所与の諸条件に基づく不平等や差別的待遇の解消を

制度化しようとする国際的な流れである⁴⁴⁾。キング没後の1970年代以降に制度化されたアフターマティヴ・アクションで、高い資質を有する人々の多くがゲットーを脱出できた一方、歴史的に不利な立場を強いられてきたゲットー住民の多くはより機会に恵まれた外の世界への脱出や内部での自立の道を閉ざされたまま残された。この間にはまた、かつては黒人ゲットーにおいてさえそれなりに機能した、階級を超えた相互扶助を旨とするコミュニティの団結の衰退も促進された。キング牧師は努力が正当に評価される社会に向けて差別の撤廃に寄与したという意味で、この個人主義の流れを促進するとともに、その実現のための社会運動を通じて、相互扶助を旨とするコミュニティの樹立、回復、あるいは維持にも尽力した。あまりにも早く訪れた最晩年に彼が取り組んだ未完の課題が、より現実的な、階級やジェンダーを超えた黒人の団結による、「人種」に関わりなく、貧しき人々の経済的な自立権の保障を要求する運動だったことは、改めて記憶されるべきであろう⁴⁵⁾。キング牧師が学校や居住区といった空間的な共有を意味する「人種統合」の実現を前提として経済的平等の達成を目指す「人種統合主義者」として振舞ったのは、本心からというよりも、むしろ広範に良心的な国民に支持を拡大するための全体社会向けの戦略的なポーズであったと見るべきである。あまりにも短かった後半生で、キング牧師は「人種統合」という言葉に象徴される居住区レベルでの空間の共有の実現によるゲットーの解消を優先するよりも、むしろ黒人民衆を多く含む広範な国民的レベルでの貧困の解消と経済的自立権の保障の実現という意味での「経済的正義」、すなわち実質的な平等化の進展を構想する、より現実主義的な考え方をその後の社会変革運動の基軸として措定し直した。そしてそのような運動を効果的に持続させ、広範な人々の連帯を得るための前提的な基盤として、階級とジェンダーを超えた黒人コミュニティの団結を何よりも重視する立場に回帰したという意味で、キング牧師の基本思想は、白人リベラル派よりも、むしろ「黒人ナショナリスト」と呼ばれる人々と共鳴する部分がより多く、それは黒人独自のキリスト教解釈の伝統にも即していたのである。以上をささやかな結論として本稿を閉じることとする。

【註】

- 1) 南山大学地域研究センター2016～2018年度共同研究・川島正樹研究代表班『「1968年」の意義に関する総合的研究——『時代の転換期』の解剖』
(<http://rci.nanzan-u.ac.jp/rc-ri/joint-research/011526.html>)。なおこの共同研究の以下のまとめ本も併せて参照されたい。藤本博編『「1968年」再訪——時代の転換期の解剖』(行路社、2018年)。
- 2) パリの「五月革命」に関しては、藤本編『「1968年」再訪』所収、中村督「第7章 68年5月の神話に関する一考察——記憶・歴史・世論をめぐって」を参照されたい。
- 3) 「プラハの春」に関しては、みすず書房編集部編『戦車と自由 チェコスロバキア事件資料集(全2巻)』(みすず書房、1968年)を参照されたい。
- 4) 日本における「1968年」の歴史的意義に関する最も信頼すべき包括的研究としては、先に触れた南山大学地域研究センター共同研究にも参加された小熊英二氏の名著を参照されたい。小熊英二『1968<上>——若者たちの叛乱とその背景』(新曜社、2009年)；同『1968<下>——叛乱の終焉とその遺産』(新曜社、2009年)。
- 5) ベトナム戦争に関しては、上述の共同研究を主宰した藤本博氏の著作を参照されたい。藤本博『ヴェトナム戦争研究——「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服』(法律文化社、2014年)。
- 6) 日本でも上映されてヒットした映画『いちご白書』(*The Strawberry Statement*, 1970)の元になった1968年のコロンビア大学における学生運動に関する信頼のおける簡便な説明としては、以下の英語版Wikipediaを参照されたい。Columbia University protests of 1968, in

https://en.wikipedia.org/wiki/Columbia_University_protests_of_1968, accessed on August 18, 2019.

7) 市民権運動博物館および「MLK50」に関しては、以下の URL を参照されたい。National Civil Rights Museum, in <https://www.civilrightsmuseum.org/>, accessed on August 18, 2019; MLK50, in <https://mlk50.civilrightsmuseum.org/>, accessed on August 18, 2019. なお本稿においては“civil rights”を「基本的な市民としての諸権利」を略して「市民権」と訳す。その理由の詳細については、是非とも次の拙著の冒頭の説明を参照されたい。川島正樹『アメリカ 市民権運動の歴史——連鎖する地域闘争と合衆国社会』（名古屋大学出版会、2008年）：「はじめに」。

8) このような従来の「官製キング牧師像」に修正を提起した初期の研究としては、拙稿を含む以下の文献を参照されたい。川島正樹「1965年夏以降のM・L・キング——FBI秘密ファイルの再検討を中心に」『歴史評論』第531号（1994年7月）、19-34頁；Michael K. Honey, *Going Down Jericho Road: The Memphis Strike, Martin Luther King's Last Campaign* (New York: W. W. Norton, 2008). またキング牧師の最新の簡便かつ信頼のおける評伝としては、黒崎真『マーティン・ルーサー・キング——非暴力の闘士』（岩波書店、2018年）を参照されたい。加えて、キング牧師を間近で観察した歴史家による次の文献も参照されたい。クレイボーン・カーソン編、梶原寿訳『マーティン・ルーサー・キング自伝』（日本基督教団出版局、2001年）、原書：Clayborn Carson, *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.* (New York: Intellectual Properties Management, 1998)。

9) 本稿は2018年11月24日に天理大学で開催された天理大学アメリカス学会年次大会で筆者によって行われた記念講演の際に用意された読み上げ原稿に修正と加筆をしたものである。

10) モントゴメリー・バス・ボイコット運動の詳細およびその歴史的意義に関しては、以下の拙稿を参照されたい。川島正樹「公民権運動を始動させた女性たち——モントゴメリー・バス・ボイコットに関するジョー・アン・ロビンソンの手記」『生活の科学』第14号（椙山女学園大学生活科学部、1992年4月）、69-81頁；川島正樹「モントゴメリーは公民権運動の出発点たりうるか？——モントゴメリー・バス・ボイコットの生成・発展過程の再検討」『アメリカ史研究』第15号（1992年8月）、29-43頁。

11) キング牧師の「私には夢がある」演説の英語原文と日本語訳はネット上に数多くあるが、ここでは次を例示する。Martin Luther King, Jr., I Have a Dream, in <https://americanrhetoric.com/speeches/mlkihadream.htm>, accessed on August 19, 2019; 「私には夢がある」（1963年）、in

<https://americancenterjapan.com/wp/wp-content/uploads/2015/09/wwwf-majordocs-king.pdf>, accessed on August 19, 2019; キング牧師「I Have a Dream」演説全文&和訳, in <https://www.tomorokoshi.com/entry/martin-luther-king-jr>, accessed on August 19, 2019.

12) ジョンソン大統領が「結果の平等」に触れた「ハワード大学演説」（1965年6月4日）に関しては、以下を参照されたい。Lyndon B. Johnson, Commencement Address at Howard University: “To Fulfill These Rights,” June 4, 1965, in https://www.brown.edu/Departments/Economics/Faculty/Glenn_Loury/louryhomepage/teaching/Ec%20137/Ec%20137%20spring07/President%20Lyndon%20B%20Johnson%27s%20Howard%20University%20Speech.pdf, accessed on August 19, 2019.

13) ジョンソン大統領の諮問委員会（委員長に指名されたイリノイ州知事オットー・カーナー [Otto Kerner] の名を関して「カーナー委員会」と呼ばれた）の報告書（序文）に関しては、以下を参照されたい。REPORT OF THE NATIONAL ADVISORY COMMISSION ON CIVIL DISORDERS SUMMARY OF REPORT, INTRODUCTION, in <http://www.eisenhowerfoundation.org/docs/kerner.pdf>, accessed on August 19, 2019.

14) 川島「1965年夏以降のM・L・キング」。

15) Alex Nitkin, 50 Years Ago MLK Lived In, Led Fair Housing Fight From Chicago's West

Side, in

<https://www.dnainfo.com/chicago/20160125/north-lawndale/50-years-ago-mlk-lived-led-fair-housing-fight-from-chicagos-west-side/>, accessed on August 18, 2019; The MLK Memorial District & Dr. King Legacy Apartments, in

<https://lcdc.net/mlk-historical-memorial-district/>, accessed on August 18, 2019.

16) 「第二次大移動」と「第二次ゲットー」に関しては、以下を参照されたい。ニコラス・レマン著、松尾式之訳『約束の土地——現代アメリカの希望と挫折』（桐原書店、1993）、原書：Nicholas Lemann, *The Promised Land: The Great Black Migration and How It Changed America* (New York: Knopf, 1991).

17) この間の事情に関しては、川島「1965年夏以降のM・L・キング」を参照されたい。なお「ベトナムを越えて」の英語前文に関しては、以下のURLを参照されたい。Martin Luther King, Jr., *Beyond Vietnam: A Time to Break Silence*, April 4, 1967, Riverside Church, New York, in https://www.crmvet.org/info/mlk_viet.pdf, accessed on August 18, 2019.

18) 例えば次の文献を参照されたい。上坂昇『キング牧師とマルコムX』（講談社、1994年）；ジェイムズ・H. コーン著、梶原寿訳『夢か悪夢か——キング牧師とマルコムX』（日本基督教団出版局、1996年）、原書：James H. Cohn, *Martin & Malcolm & America: A Dream and a Nightmare* (New York: Orbis Books, 1991).

19) FBIの注目と対敵諜報活動（COINTELPRO）に関しては、拙稿（川島「1965年夏以降のM・L・キング」）のほか、詳細については、Honey, *Going Down Jericho Road*, pp. 90-94, 231-232, 364-365を参照されたい。加えて、1968年のキング牧師とロバート・ケネディの相次ぐ暗殺に関しては、特例的に開示を認められた秘密ファイルに基づいて1975年に再捜査を行った連邦上院のチャーチ委員会による以下の報告書も参照されたい。Church Committee, *The FBI, Cointelpro, and Martin Luther King, Jr.: Final Report of the Select Committee to Study Governmental Operations with Respect to Intelligence Activities* (St. Petersburg, FL: Red and Black Publishers, 2011).

20) 連邦捜査局の「人種」偏見に関しては、以下の拙稿を参照されたい。川島正樹「ガーヴィー運動の生成と発展（1914～1924年）——第一次大戦後の米国での活動を中心として——」『史苑』第50巻1号（1990年3月）、48-84頁；同「ガーヴィー運動衰退期のマークス・ガーヴィー（1925～1940年）」『史苑』第54巻2号（1994年3月）、57-78頁。市民権運動に対する妄想的な反共主義に基づく当局と反動派白人による弾圧に関しては、以下を参照されたい。Yasuhiro Katagiri, *Black Freedom, White Resistance, and Red Menace: Civil Rights and Anticommunism in the Jim Crow South* (Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 2014).

21) シカゴにおける第一次ゲットーの発展に関しては、以下を参照されたい。竹中興慈『シカゴ黒人ゲトー成立の社会史』（明石書店、1995年）。

22) 筆者によるシカゴのウェストサイドでの聞き取り調査に関しては、以下の未刊行の報告書の「イリノイ州シカゴ」の項目を参照されたい。川島正樹「平成13年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（C）－（2）：課題番号13610462）研究報告書——現地聞き取り調査を主要方法とする米国公民権運動史研究」（南山大学、2003年5月発行）。

23) 「住宅開放」（Open Housing）をスローガンとした「シカゴ自由運動」（the Chicago Freedom Movement）およびその後黒人初の市長となるハロルド・ワシントン（Harold Washington）キング牧師の撤退の後も続く闘争に関しては、次の二冊を参照されたい。James Ralph, *Northern Protest: Martin Luther King, Jr., Chicago, and the Civil Rights Movement* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1993)；Alan B. Anderson and George W. Pickering, *Confronting the Color Line: The Broken Promise of the Civil Rights Movement* (Athens, Georgia: University of Georgia Press, 2008).

24) Honey, Honey, *Going Down Jericho Road*, pp. 76-79, 88-89.

25) *Ibid.*, pp. 1-2.

- 26) Ibid., p. 2.
- 27) Ibid.
- 28) Ibid., chap. 8.
- 29) Ibid., chaps. 16 and 17.
- 30) キング牧師の「山頂演説」の映像に関しては、次を参照されたい。Martin Luther King's Last Speech: "I've Been To The Mountaintop," in <https://www.youtube.com/watch?v=0ehry1JC9Rk>, accessed on August 19, 2019.
- 31) キング牧師の「山頂演説」の全文に関しては、次を参照されたい。Martin Luther King, Jr., I've Been to the Mountaintop, in <https://www.americanrhetoric.com/speeches/mlkivebeentothemountaintop.htm>, accessed on August 19, 2019.
- 32) Honey, Honey, *Going Down Jericho Road*, p. 425.
- 33) Ibid., Epilogue.
- 34) ジェームズ・アール・レイとキング牧師暗殺事件に関しては、Gerald Posner, *Killing the Dream: James Earl Ray and the Assassination of Martin Luther King, Jr.* (New York: Random House, 1998)を参照されたい。
- 35) ロバート・ケネディの大統領選キャンペーンに関しては、以下を参照されたい。Thurston Clarke, *The Last Campaign: Robert F. Kennedy and 82 Days That Inspired America* (New York: Henry Holt and Co., 2008).
- 36) 1968年の大統領選挙の概要を知るためには、次のWikipediaのウェブサイトが簡便である。1968 United States presidential election, in https://en.wikipedia.org/wiki/1968_United_States_presidential_election, accessed on August 19, 2019.
- 37) Dean J. Kotlowski, "Richard Nixon and the Origins of Affirmative Action," *The Historian*, Vol. 60, No. 3 (Spring 1998): pp. 523-541.
- 38) アファーマティヴ・アクションに関しては、次の二冊の拙著を参照されたい。川島正樹『アファーマティヴ・アクションの行方——過去と未来に向き合うアメリカ』(名古屋大学出版会, 2014年); Masaki Kawashima, *American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey* (Singapore, Singapore: Palgrave-Macmillan [Springer-Nature], January 2017).
- 39) Daniel Kreps, "Paul McCartney Meets Women Who Inspired Beatles' 'Blackbird': Two Members of the Little Rock Nine Visit Singer Backstage at Arkansas Concert," *Rolling Stone*, May 1, 2016, in <https://www.rollingstone.com/music/music-news/paul-mccartney-meets-women-who-inspired-beatles-blackbird-57076/>, accessed on February 17, 2019.
- 40) イギリスの1968年の移民制限法の概略に関しては、以下を参照されたい。Commonwealth Immigrants Act 1968, from Wikipedia, in https://en.wikipedia.org/wiki/Commonwealth_Immigrants_Act_1968, accessed on February 20, 2019.
- 41) 「ゲット・バック」のアップル・レコード社の屋上での非合法的なコンサートの模様は、次のURLで視聴可能である。The Rooftop Concert, The Beatles Get Back, in <https://vimeo.com/229775903>, accessed on February 20, 2019.
- 42) Helplessの音声に関しては次のYouTubeのサイトで当時のレコードを聴くことができる。Helpless, in <https://www.youtube.com/watch?v=C8LY0yqJE7k>, accessed on August 19, 2019.
- 43) 黒人の独自のキリスト教的伝統思想に関しては、以下を参照されたい。黒崎真『アメリカ黒人とキリスト教——葛藤の歴史とスピリチュアリティの諸相』(神田外語大学出版局, 2015

年)。

44) 人類史の大きな流れに関しては、以下を参照されたい。市井三郎『歴史の進歩とはなにか』(岩波書店、1971年)。

45) キング牧師が最後に出版した本の題名は象徴的である。Martin Luther King, Jr., *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* (Boston, MA: Beacon Press, 1967), 翻訳: マーチン・ルーサー・キング著、猿谷要訳『黒人の進む道』(サイマル出版会、1968年)。

【参考文献】

- Anderson, Alan B., and George W. Pickering. *Confronting the Color Line: The Broken Promise of the Civil Rights Movement*. Athens, Georgia: University of Georgia Press, 2008.
- Church Committee. *The FBI, Cointelpro, and Martin Luther King, Jr.: Final Report of the Select Committee to Study Governmental Operations with Respect to Intelligence Activities*. St. Petersburg, FL: Red and Black Publishers, 2011.
- Clarke, Thurston. *The Last Campaign: Robert F. Kennedy and 82 Days That Inspired America*. New York: Henry Holt and Co., 2008.
- Columbia University protests of 1968. In https://en.wikipedia.org/wiki/Columbia_University_protests_of_1968, accessed on August 18, 2019.
- Commonwealth Immigrants Act 1968, from Wikipedia. In https://en.wikipedia.org/wiki/Commonwealth_Immigrants_Act_1968, accessed on February 20, 2019.
- Goudsouzian, Aram, ed. *An Unseen Light: Black Struggles for Freedom in Memphis, Tennessee*. Lexington, KY: The University Press of Kentucky, March 2018.
- Helpless. In <https://www.youtube.com/watch?v=C8LY0yqJE7k>, accessed on August 19, 2019.
- Honey, Michael K. *Going Down Jericho Road: The Memphis Strike, Martin Luther King's Last Campaign*. New York: W. W. Norton, 2008.
- Honey, Michael B. *To the Promised Land: Martin Luther King and the Fight for Economic Justice*. New York: W.W. Norton, 2018.
- Johnson, Lyndon B. Commencement Address at Howard University: "To Fulfill These Rights," June 4, 1965. In https://www.brown.edu/Departments/Economics/Faculty/Glenn_Loury/louryhomepage/teaching/Ec%20137/Ec%20137%20spring07/President%20Lyndon%20B%20Johnson%27s%20Howard%20University%20Speech.pdf, accessed on August 19, 2019.
- Katagiri, Yasuhiro. *Black Freedom, White Resistance, and Red Menace: Civil Rights and Anticommunism in the Jim Crow South*. Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 2014.
- Kawashima, Masaki. *American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey*. Singapore: Palgrave-Macmillan of Springer-Nature, 2017.
- King, Martin Luther, Jr., *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* Boston, MA: Beacon Press, 1967 (キング、マーチン・ルーサー著、猿谷要訳『黒人の進む道』[サイマル出版会、1968年])。
- King, Martin Luther, Jr., Beyond Vietnam: A Time to Break Silence, April 4, 1967, Riverside Church, New York, in https://www.crmvet.org/info/mlk_viet.pdf, accessed on August 18, 2019.
- King, Martin Luther, Jr., I Have a Dream. In <https://americanrhetoric.com/speeches/mlkihaveadream.htm>, accessed on August 19, 2019.

- King, Martin Luther, Jr., I' ve Been to the Mountaintop. In <https://www.youtube.com/watch?v=0ehry1JC9Rk>, accessed on August 19, 2019.
- King, Martin Luther, Jr., I' ve Been to the Mountaintop. In <https://www.americanrhetoric.com/speeches/mlkivebeentothemountaintop.htm>, accessed on August 19, 2019.
- Kotlowski, Dean J. "Richard Nixon and the Origins of Affirmative Action." *The Historian*. Vol. 60, No. 3 (Spring 1998): pp. 523-541.
- Kreps, Daniel. "Paul McCartney Meets Women Who Inspired Beatles' 'Blackbird' : Two Members of the Little Rock Nine Visit Singer Backstage at Arkansas Concert." *Rolling Stone*, May 1, 2016. In <https://www.rollingstone.com/music/music-news/paul-mccartney-meets-women-who-inspired-beatles-blackbird-57076/>, accessed on February 17, 2019.
- MLK50. In <https://mlk50.civilrightsmuseum.org/>, accessed on August 18, 2019.
- The MLK Memorial District & Dr. King Legacy Apartments. In <https://lcdc.net/mlk-historical-memorial-district/>, accessed on August 18, 2019.
- National Civil Rights Museum. In <https://www.civilrightsmuseum.org/>, accessed on August 18, 2019.
- Nitkin, Alex. 50 Years Ago MLK Lived In, Led Fair Housing Fight From Chicago' s West Side. In <https://www.dnainfo.com/chicago/20160125/north-lawndale/50-years-ago-mlk-lived-led-fair-housing-fight-from-chicagos-west-side/>, accessed on August 18, 2019.
- 1968 United States presidential election. In https://en.wikipedia.org/wiki/1968_United_States_presidential_election, accessed on August 19, 2019.
- Posner, Gerald. *Killing the Dream: James Earl Ray and the Assassination of Martin Luther King, Jr.* New York: Random House, 1998.
- Ralph, James. *Northern Protest: Martin Luther King, Jr., Chicago, and the Civil Rights Movement*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1993.
- REPORT OF THE NATIONAL ADVISORY COMMISSION ON CIVIL DISORDERS SUMMARY OF REPORT, INTRODUCTION. In <http://www.eisenhowerfoundation.org/docs/kerner.pdf>, accessed on August 19, 2019.
- The Rooftop Concert, The Beatles Get Back. In <https://vimeo.com/229775903>, accessed on February 20, 2019.
- 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』(岩波書店、1971年)
- 小熊英二『1968<上>——若者たちの叛乱とその背景』(新曜社、2009年)
- 小熊英二『1968<下>——叛乱の終焉とその遺産』(新曜社、2009年)
- カーソン、クレイボーン編、梶原寿訳『マーティン・ルーサー・キング自伝』(日本基督教団出版局、2001年)、原書: Carson, Clayborn. *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.* New York: Intellectual Properties Management, 1998.
- 川島正樹「ガーヴィー運動の生成と発展(1914~1924年)——第一次大戦後の米国での活動を中心として」『史苑』第50巻1号(1990年3月), 48-84頁
- 川島正樹「ガーヴィー運動衰退期のマーカス・ガーヴィー(1925~1940年)」『史苑』第54巻2号(1994年3月), 57-78頁
- 川島正樹「1965年夏以降のM・L・キング——FBI秘密ファイルの再検討を中心に」『歴史評論』第531号(1994年7月), 19-34頁
- 川島正樹「平成13年度~平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C) — (2): 課題番号13610462) 研究報告書——現地聞き取り調査を主要方法とする米国公民権運動史研究」(南

- 山大学、2003年5月発行)
- 川島正樹『アメリカ 市民権運動の歴史——連鎖する地域闘争と合衆国社会』(名古屋大学出版会、2008年)
- 川島正樹『アフーマティヴ・アクションの行方——過去と未来に向き合うアメリカ』(名古屋大学出版会、2014年)
- 川島正樹「アメリカ大衆音楽と『人種』の陰影——ソウル、カントリー、そしてフォークをめぐる歴史的素描の試み」、『アカデミア(社会科学編)』第17号(2019年6月)、1-29頁
- キング牧師「私には夢がある」(1963年)、in
<https://americancenterjapan.com/wp/wp-content/uploads/2015/09/wwwf-majordocs-king.pdf>, accessed on August 19, 2019.
- キング牧師「I Have a Dream」演説全文&和訳. In
<https://www.tomorokoshi.com/entry/martin-luther-king-jr>, accessed on August 19, 2019.
- 黒崎真『アメリカ黒人とキリスト教 — 葛藤の歴史とスピリチュアリティの諸相』(神田外語大学出版局、2015年)
- 黒崎真『マーティン・ルーサー・キング——非暴力の闘士』(岩波書店、2018年)
- コーン、ジェイムズ・H. 著、梶原寿訳『夢か悪夢か——キング牧師とマルコムX』(日本基督教団出版局、1996年)、原書: Cohn, James H. *Martin & Malcolm & America: A Dream and a Nightmare*. New York: Orbis Books, 1991.
- 竹中興慈『シカゴ黒人ゲトー成立の社会史』(明石書店、1995年)
- 藤本博『ヴェトナム戦争研究——「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服』(法律文化社、2014年)
- 藤本博編『「1968年」再訪——時代の転換期の解剖』(行路社、2018年)
- みすず書房編集部編『戦車と自由——チェコスロバキア事件資料集(全2巻)』(みすず書房、1968年)
- レマン、ニコラス著、松尾式之訳『約束の土地——現代アメリカの希望と挫折』(桐原書店、1993)、原書: Lemann, Nicholas. *The Promised Land: The Great Black Migration and How It Changed America*. New York: Knopf, 1991.